□には、リンクがあります。※は、WAMNETの事業者情報にリンクします。

事業所名　グループホーム　なぎみ苑　※

日付　平成18年11月8日
特定非営利活動法人
評価機関名　ライフサポート

評価調査員　在宅介護経験15年
評価調査員　老人保健施設介護実務経験6年、居宅支援事業所介護支援専門員経験6年

自主評価結果を見る

評価項目の内容を見る

事業者のコメントを見る（改善状況のコメントがあります！）※

外部評価の結果

講評

全体を通して（特に良いと思われる点など）

奈義町の高齢者福祉・介護を現場で支えてきた母体の（福）慈風会（特別養護老人ホーム、一連の在宅介護支援事業、給食サービス等）にグループホームの設立を町から要請を受けて、平成13年4月に設立された。岡山県で36番目、県北では5番目位のグループホームの草分けである。地域交流センターと同じ棟で、特養ホームの建物に増設された。当時の建物としては、リビングルームや居室もゆったりとしたスペースで、外部の庭や、菜園も十分にゆとりがあり、特養ホームの雰囲気とは全く異なる雰囲気である。

食事や家事の手伝いが出来る利用者が半数位居て、野菜を切ったり、味付けをしたり、盛り付け、配膳、片付けに参加している。中でも「お客さんが来られているのに、おなごが椅子に腰掛けて何もせん。どういうこっちゃ!!」といらいらしながら食事の準備を仕切っている。こんな人が居る反面、人に向かって「ばか！」「カス！」と罵声をあびせながら、リビングルームの周りをグルグル回っている。職員が手をつないであげると機嫌よく歩いている。職員は、それぞれの人に「ありがとう」「お願いします」と声をかけたり、スキンシップを加えながら話し話しかけ、心の交流、気持の落ち着きに気を配っている。

「もう、そろそろ仕事が出来んようになったので、やめさせてもらって帰らんといけん」とお辞儀をして帰ろうとする。職員がグループホームの周りを一周してホームへ帰ってくると落ち着く。奈義山を背景に田や川の辺りは散歩の最良の土地柄である。

利用者の症状の重症化に伴って、利用者の希望や意志をどのように受け止め、実行してあげられるかが重要な課題である。一人ひとりの気持に納得させる支援をして、満足感を少しでも持ってもらえるよう職員一同が日々努力している姿を見せてもらった。

特に改善の余地があると思われる点　　次のような提案をした

① 主任の努力で、食事をグループホームの厨房で材料の加工や煮炊きを利用者と一緒に出来るようになっている。特養と共用している部分の利点も大きいが、利用者が生活していると言う独自性も考えて、材料の調達から全てホームで考える食事も積極的に加えていって欲しい。

② 介護計画や記録など、特養ホームの様式を継承しているが、グループホームの主体性のある利用者と家族を重視した方式を工夫して、その人らしさの見える記録が欲しい。

Ⅰ 運営理念

番号	項目	できている	要改善
1	理念の具体化、実現及び共有	○	
記述項目	グループホームとしてめざしているものは何か		

一期一会の気持ちを大切にして、利用者に声かけし、寄り添い、快適で安心な生きがいのある生活をしてもらえるよう、理念と方針を実現するよう努力している。

事務所には「認知症の人に対面する時の基本」が掲示して、職員がその12項目について理解出来るようにしている。認知症のことを理解して、利用者に接する心掛けの具体化であろう。

このグループホームは特養ホームに併設していて、その利点は本人や家族にとっても心強い面はあるが、反面、グループホームは利用者主体の生活の場であるという基本理念を尊重し、職員も利用者に対するケアの質の向上に直視できるような環境も更に与えてあげてもらいたい。

Ⅱ生活空間づくり

番号	項目	できている	要改善
2	家庭的な共用空間作り	○	
3	入居者一人ひとりに合わせた居室の空間づくり	○	
4	建物の外回りや空間の活用	○	
5	場所間違い等の防止策	○	
記述項目	入居者が落ち着いて生活できるような場づくりとして取り組んでいるものは何か		

入口に貼ってある写真は自分の部屋という認識ができ、落ち着ける。布団を敷いたり、ベッドで寝たりして利用者の身体的機能や生活スタイルに合わせて、自分らしさを発揮した部屋にしている。

各部屋は中庭に面しており、居室は掃き出し窓と障子、縁側があり、開放的であり、以前に住んでいた田舎の家庭の雰囲気と住機能を醸し出している。中庭や入口、駐車場などのスペースを菜園にして、野菜や花を植えて収穫の楽しみもある。何と言ってもリビングルームの広い一面は総ガラス窓になっており、奈義山一帯が額縁の絵の如く、四季折々の季節感が味わえるのは何にも変え難い絶品であり、利用者の心に与える自然の力は大きい。

Ⅲケアサービス

番号		できている	要改善
6	介護計画への入居者・家族の意見の反映	○	
7	個別の記録	○	
8	確実な申し送り・情報伝達	○	
9	チームケアのための会議	○	
10	入居者一人ひとりの尊重	○	
11	職員の穏やかな態度と入居者が感情表現できる働きかけ	○	
12	入居者のペースの尊重	○	
13	入居者の自己決定や希望の表出への支援		○
14	一人でできることへの配慮	○	
15	入居者一人ひとりにあわせた調理方法・盛り付けの工夫	○	
16	食事を楽しむことのできる支援	○	

Ⅲ ケアサービス（つづき）

番号	項目	できている	要改善
17	排泄パターンに応じた個別の排泄支援	○	
18	排泄時の不安や羞恥心等への配慮	○	
19	入居者一人ひとりの入浴可否の見極めと希望にあわせた入浴支援	○	
20	プライドを大切にした整容の支援	○	
21	安眠の支援	○	
22	金銭管理と買い物の支援	○	
23	痴呆の人の受診に理解と配慮のある医療機関、入院受け入れ医療機関の確保	○	
24	身体機能の維持	○	
25	トラブルへの対応	○	
26	口腔内の清潔保持	○	
27	身体状態の変化や異常の早期発見・対応	○	
28	服薬の支援	○	
29	ホームに閉じこもらない生活の支援	○	
30	家族の訪問支援	○	
記述項目	一人ひとりの力と経験の尊重やプライバシー保護のため取り組んでいるものは何か		

特養ホームの厨房で調理され配膳された食事がグループホームにも提供されていた。当然冷たいご飯を食べていた。「食事は利用者にとって一番の楽しみであり、少なくとも調理だけはグループホームの炊事場でしてあげたい」と主任の願いであり、母体を説得し今年からようやく実現した。献立と食材は特養から提供されるが、調理には利用者も参加できるし、同じ材料を使っても調理方法を変えたり、菜園の野菜を加えたりして、自分達で盛り付けて、温かい食事が利用者と職員で楽しくできるようになり、幸せを感じることは素晴らしい改革である。特養ホームの大世帯のケアのあり方とグループホームでは、全ての面で違いは大きい中で、利用者にとっての幸せは何かを考えて実行していく前向きの気持に『あっぱれ』を捧げたい。

認知症になり、その症状が重症化していく利用者一人ひとりへの思いや手が届きにくくなっていく人を何とか自然もまま幸せにしてあげたい気持を語る主任の目に浮かぶ涙から、利用者を裏切らない正直な姿を確信することができた。

Ⅳ 運営体制

番号	項目	できている	要改善
31	責任者の協働と職員の意見の反映	○	
32	家族の意見や要望を引き出す働きかけ	○	
33	家族への日常の様子に関する情報提供	○	
34	地域との連携と交流促進	○	
35	ホーム機能の地域への還元	○	
記述項目	サービスの質の向上に向け、日頃から、また、問題発生を契機として、努力しているものは何か。		

奈義町という小さい行政区画にあって、この母体の存在価値は貴重だし、地域から期待されることも大きいと思う。特養ホームにも認知症の利用者も多くなっただろうし、在宅介護支援事業体と認知症介護専門のグループホームが共同して、この地域の認知症高齢者の地域ケアのモデルをつくっていってもらいたいと願っている。奈義町地域ケア会議が発足し、町内の全ての関係者が参加して「認知症を知ろう」などの研修をしたり、討論する機構が動き出した。運営推進会議も活用して地域が盛り上がっていくことを期待している。